

西泠印社百周年大会

大会チケット

写真は一九二三年、二〇周年大会

河野 隆（鷹之）



西泠印社は、一九〇四年に杭州の景勝地西湖の北隅に位置する孤山の一角に創始された。そこは宋代から由緒ある建物が残され、文墨に関わる長い伝統のある場所だったので、篆刻・書画・金石に親しむ杭州人が参集して、名品の鑑賞や研究のため折々雅会を催すサロンともなっていた。その良き伝統と精神を受け継いだ丁仁（鶴廬）、王禔（福庵）、呉隱（石潜）、葉銘（葉舟）の四人の金石家が協議し出資して、篆刻を中心とする書画・金石の研究団体を設立したのである。堂屋や園林等の環境を順次整備し、十年の準備期間を経て、一九一三年に正式に「西泠印社」と命名し、規約を作り、内外の同好の士を募ることになった。そして、当時江南芸苑の盟主として敬仰されていた呉昌碩を初代の社長に迎え、「金石の保存と印学の研究」を目的とする印社の活動が具体的に始まるのである。発起人の丁・王・呉・葉の四氏は当時二十代から三十代の若さでこの一大事業に取り組み、清末民初の複雑な時局に若い情熱で一丸となって斯界を動かし、苦心経営して実現した。

その後も戦争・建国・文革という困難を乗り越えて、伝統文化を継承し、新しい情報を発信する一大キーステーションとして、文墨界に非常に大きな役割を果たして来たのである。

西泠印社は創立以来、五年・十年のサイクルで記念大会を開催して来たが、昨秋十一月十八・十九・二十の三日間に亘り、西泠印社建社百年慶祝大会が盛大に取り行われた。筆者は記念すべき百年という節目の年に、在外の名誉



丁仁



王禔



吳隱



葉銘

社員に認定され、社員として初めて大会に参加することができた。その模様を簡単に報告しようと思う。

十一月十八日（火）

前日、河内利治助教と二人で杭州入りし、中国美術学院の国際教育学院四階に宿泊した。数年かけて全面改築したキャンパスは、目を見張るほど教学環境が整備されて、現中国の国力の充実を象徴しているような印象を持った。国際教育学院は留学生楼だが、恵まれた設備と広さがあり、現代のニーズに答えた何不自由ない作りである。が、ホテルと違いエレベーター設備がないのが我々のような外来の客には玉に傷である。大きなトランクをかかえて階段を上下するのは少々辛い。二十余年前に留学した河内氏は、昔日の面影を全く留めないほどに一大変貌を遂げた学院に、古き良き時代の何か大切なものが、大きな時代の流れの中で失われて行く寂寥感をいだいているようだった。

昨日、来杭の際も目にしたが、この中国美術学院のある南山路や西湖周辺の主要な道路には、西冷印社の百周年を祝う赤い横断幕や立看板が至るところに掲げられ、市を挙げて慶祝ムードを盛り上げようとしていることがわかる。『千秋金石盛事、百年文化慶典』や『弘揚民族文化、光大西冷印社』の対句表現での確に西冷印社の歴史的な役割と、百周年を迎えた意義をPRしている。大会前の十日ほどはテレビでもゴールデンタイムに特別企画を組んで、歴代社長や四人の創始者のプロフィールを紹介し、一般市民にも広くアピールしていたのだという。

十八日は予報通り朝から天気が怪しく、九時半頃から小雨がパラつき始め、十時から開催される『西冷印社建社百年慶祝大会』の式典の進行が危ぶまれた。学院前から乗ったタクシーの運転手も、西冷印社の大会で今日は北山路



や孤山路は交通規制があるとの情報を伝えてくれ、断桥近くの少年宮あたりで下されるかと不安になったが、何とか西泠橋畔までたどり着くことができた。

大会会場は孤山の北側で裏湖に面した芝生の広場に、特設ステージを造営して屋外で開催された。西泠橋を渡るとすぐ左手に印学博物館があるが、そのあたりは大会参加者ですでにごった返している。その先にある入口では係の者が入場券の確認をして入場者を厳しくチェックしている。事前に大会の準備委員会で報名を済ませ、ネームプレートや入場券を手に入れておかないと許可されないのである。この日同道した日本からの大学院生や美術学院の留学生に、急拠手配して券を入手し、全員無事入場が果せた。会場に向う途中、青年時報の記者から取材を申し込まれ、日本の篆刻愛好者や展覧会出品者の現況、西泠印社に対する関心などについて質問された。(翌朝の新聞に実名入りでインタビュー記事が載っていたのは驚いた。)

十時十五分、生憎の雨の中、大会関係者が配布した色とりどりのレインコートに身を包み、一風変わった光景の中で大会式典は始まった。特設の壇上には、浙江省及び杭州市の幹部や中国文化艺术界の代表、西泠印社の役員七、八十人が居並び、順次祝辞が述べられた。西泠印社社長の啓功氏は健康上の理由で出席されなかったが、主催者を代表した挨拶文の代読があった。日本からは小林斗盒・梅舒適両名管理事の祝辞があり、西泠印社の歴史や役割、日本との交流や今後の展望等について、それぞれの立場から思いを述べられた。その後、主要作品寄贈者に対して証書の授与があり、十一時十五分に終了した。新聞の報道によれば内外からの大会参加者は二千人に及ぶという。日本からもツアーを組んでこの大会に参加した人は二・三百人に上るだろう。その中には日本ではめったに顔を合わせる機会のない人もいて、雨中の西湖畔で旧交を温める場面もあり、これも西泠印社が取り持つ金石の縁かと思うの

だった。

式典に続いて十一時二十分から「西泠印社百年碑」の掲碑儀式が三百人ほどの印社関係者や来賓の参列の下で挙行された。この碑は西泠印社の北門を裏湖前に下り切った地点にある。高さ二・三メートルの巨石に、啓功社長の手になる「百年名社、千秋印学」の行書題字が陰刻され、文字は金色に着色されていた。伝統の継承と発展を祈念するこの記念碑は、孤山下で西泠印社の背後から、印社の今後の動向を見守る形になっている。

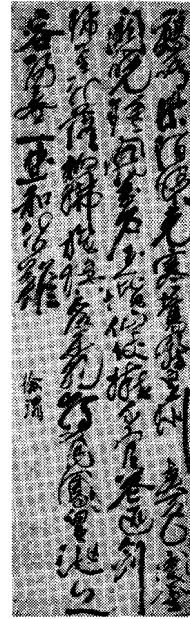
午後二時半からは杭州市内の二個所で記念の展覧会が開幕し、一般に公開された。

西湖美術館では「西泠印社藏品特展」が開かれ、相当数の書画や資料が展示された。中には十五年前に日本各地で開催された「西泠印社展」に出陳され、何回か目にした有名な作品もあったが、初見の名品も多く、大いに眼福を得る機会となった。近年新収藏品となった作品も紹介されていたが、入口近くに掲げられていた徐渭の三・五メートルに及ぶ草書大幅は、圧倒される迫力があり、鳥肌が立つほどに凄みを感じさせるものだった。しばらくその場に釘付けになり、立ち去りがたい思いに観者を誘い込む、そんな魅力溢れる作品には久し振りに出会ったように思う。

印学博物館では璽印・篆刻関係の常設展示があったが、場中何と言っても呉昌碩刻の「西泠印社中人」の朱文印が注目された。この印は缶翁七十四歳の時の刻で、西泠印社初代社長に迎えられる五年目に当る。西泠印社の創建者の中の二人・呉隱と丁仁が、初期社員の一人でしかも呉昌碩と親交のあった葛昌楹の為に、呉昌碩に制作を依頼して贈った印である。

この時期の印には息子の呉藏龕等に代刻させた作品も多く、印面を印刀の柄でたたいて粉飾した作も少なくない。しかし、呉昌碩の数多い篆刻作品中、印文に「西泠印社」の四文が入るのはこの印だけである。数年前に小林斗倉

徐渭「草書大幅」



呉昌碩「西泠印社中人」



「西泠印社百年華誕大展」開幕式



展示風景



氏が入手し、宝蔵していた氏御自慢の印の一つだが、西泠印社百周年に当り昨年6月に寄贈された。西泠印社との縁がかくも深い印は他に見当らない。初代社長の名印の里帰りは、日中を結ぶ印壇の佳話として、当時六種の新聞に「西泠名印重帰故里」と大きく報じられた。

また、市街地からはだいたい離れた場所にある杭州和平国際展中心では、「西泠印社百年華誕大展」が開幕した。内容は「西泠印社百年史展」、「社員作品展」、「社員学術成果展」、「国際印学社団精品博覧」、「海外書法社団作品交流展」、「祝賀西泠印社百年華誕作品展」に分けられ、様々なイベントを行う巨大なフォーラムが仕切られて特設の展示会場になっていた。印社百年の歴史の跡を高さ二、三メートルの大パネルに仕立ててビジュアルに紹介したスケールと、今までに観たこともないほどの篆刻・書画の夥しい作品にただ唾然としてしまう。あれだけ一堂に観せられると、一作ごとの印象は完全にうすれ、鑑賞というよりは、百年に一度の総力を挙げた一大イベントに参加したという充足感を、あの巨大空間の中で味わうことに意義を見出さなければならぬものかも知れない。

この日始まった杭州市内の七種の展覧会に先立ち、十月二十五日から十一月二日まで北京の中国美術館でも「西泠印社百年華誕特展」が挙行され、計八種の百年記念展が企画実施された。江南を舞台に形成された印学の伝統を、西泠印社はその中心的存在となって継承し発展させるのだという立場を、内外に強くアピールするものであった。

十一月十九日（水）

この日も冷雨が降り続き、百年大会は完全に雨にたたられてしまったようだが、その分だけ強く記憶に残るようになるのだろう。

午前中は「国際印学研討会」が行われ、西泠印社社員や内外の印学研究者



劉江氏 題字揮毫



約二百人が参加した。6月30日までに寄せられた印学に関する論文は二百数十篇に上るが、数次の選評を経て六十二篇が選出され、今大会の採用論文となった。その全容は印社発行の「国際印学研討会論文集」に収録されている。研討会では金鑒才理事の進行の下で進められたが、時間の関係で十八名が論旨の概要を紹介したに止り、質疑応答の余裕は持てなかった。

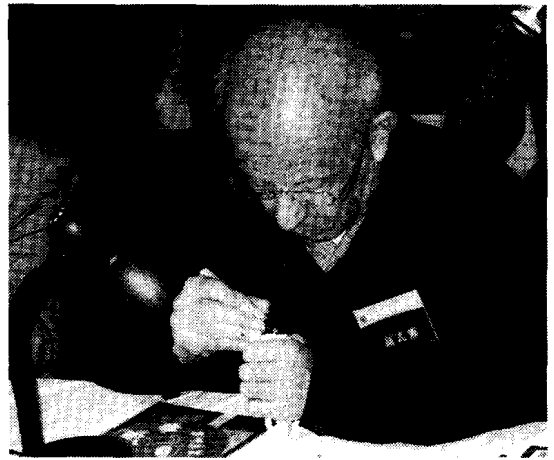
午後一時半からは花港飯店3階において「慶祝西泠印社百年華誕篆刻書画現場創作交流活動」が「大型筆会」と銘打って実施された。花港庁、黄龍庁とエレベーター前のホールが会場となり、二百名前後の人が参加して席上制作を繰り広げた。メイン会場となった花港庁の入口には社員以外は完全にシャットアウトする厳しいチェックがあり、もっと解放すべきだという批判も出ていたようだ。広い会場は大机が五列に配置され、中三列は篆刻、左右窓側は書と画に分かれて準備されていた。

最初に、呂国璋秘書長から紹介があり、前方の特大大机で来賓と印社幹部の席上揮毫が行われた。画仙全紙に沈鵬氏（中国書法家協会主席）は自作七絶を得意の行草で書き、副社長の郭仲選氏は行書で対聯を認めた。日本を代表して梅舒適氏も七言二句を草書で表演し、三者三様の書きぶりに多くの人が人垣を作って見入っていた。その後、参加者は自由にそれぞれの制作に取り組んだが、三、四人の書画の合作もあちこちで試みられた。三六判の大画仙を四、五枚つないだ大画面に、牡丹と紫藤を三人の画家が描き、最後に劉江氏に題字を乞い、それに応じる場面も見られた。このようにして広い会場のあちこちで大小様々な作品が次々に仕上がって行った。

また、随意的の制作とは別に、テーマに基づいた制作も並行して進められた。篆刻の課題は、中国の歴代オリソニック金メダリスト百人の姓名である。

予めこの日の篆刻制作を申し込んだ社員に割り当てられた。印材は八分角前後の青田の佳材。選手の姓名を刻ることはもちろんだが、何年・何国開催大

高式熊氏刻印



篆刻課題作品制作



会・何競技かを側款に刻るよう、それぞれ五十字内外の記事が指示されている。皆その場で構成を考え、布字・奏刀して一、二時間のうちに仕上げる。完成した印は、側款採拓の三人の専門班が待機して、またたくまに側款の拓を採り、鈴印する。そしてそれを副社長の高式熊・劉江・韓天衡の三氏が既に題字を書き入れた三冊の冊頁に順次貼り込んで行く。夕刻までに百印が刻り上り、成譜された。席上の即興作ゆえに十分な用意はできない。刀も材も借り物で手元の明るさも心もとない。しかし、そんな状況の中でも皆楽しんで、思い思いに繰り広げる刻印の競演は、日本ではまず見ることのない光景である。中国の印人はほとんどが左手で材を持ち、右から左へ横への動きで運刀していた。日本では引き刀か押し刀で縦への動きで奏刀する人が多いのと対照的である。また、印床を用いる人もあまりいないようだった。中には印材の頭を机の上につけ、立ったままの姿勢で刻る人もいて、興味深く一人一人の刻り様を見学できた。

筆者に割り当てられた印は、ソウルオリンピック男子卓球ダブルスの一人「陈龙灿」という選手だったが、簡体字の「灿」字がわからず、旧知の朱昆明氏に相談して「燦」であると教えられ、安心して制作に取り組めた。しかし、集中して刻っている最中にも見知らぬ社員が一かかえもある大きな青田石を持参して、百年大会の記念に署名を求める。印刀で側款を刻る要領で姓名を刻らされ、相前後して三人に同様の対応をした。

また、私の右隣で印を刻っていた蒋永義氏と名刺交換をして、二十年前に揚州の文物商店であったあの刻印を二顆買ったことがありますと挨拶したら、ニコツと笑ってこの日の出会いを喜んでおられた。このような社員間の交流は、日本から来た我々にとっては貴重な機会となり、「大型筆会」に参加する意義はやはり大きいものがある。この百人の金メダリストの刻印企画は、二〇〇八年の北京オリンピックに、文化芸術団体として協賛するもので、こ

「百花横卷」黄鎮中氏



の日出来上った三冊の印譜冊は、北京オリンピック委員会に贈られるという。書は「寿」字が課題である。画仙半截を横にした長巻に、それぞれが得意の「寿」字を揮毫して「百寿横巻」が完成した。

画もまた「百花」がテーマで、これも書と同じ長巻に次々と色鮮やかな花卉が描かれ、まさに百花斉放の共演を一人一人が楽しんでこなしていた。

いずれの場面でも、百周年という節目とともに迎え、喜び、祝う心から発する自然体で臨み、それぞれの持ち味を発揮しているように見受けられた。

十一月二十日（木）

大会三日目は、西冷印社第11次社員大会が午前8時半から夕刻まで開かれた。在外の名誉理事や社員は今までの大会に参加した例はないようである。

「西冷印社第六屆理事会工作報告」と「西冷印社章程」が承認され、幹部役員の選挙が行われた。啓功社長が再選され、秘書長に副社長の一人である陳振濂氏が兼務することになった。新設された名誉副社長に呂国璋・高式熊両氏とともに日本から小林斗盦・梅舒適両氏、韓国から金膺顕氏の五人が着任され、さらに、二十四名の顧問が推戴された。その他にも実務系に若干の人事異動があったが、大きな改革は研究室の制度を導入した点にある。西冷印社が関わる分野を五つの研究室に分け、主任に各二名の理事を配置して、役割分担を明確にし、円滑に遂行するようセクションをはっきりさせたのである。五研究室は次の通りである。

篆刻創作研究室

印学理論与社史研究室

書法研究室

国画研究室

鑒拠址収蔵研究室

これら新人事の決定をもって三日に亘った百周年大会のすべてを終了したのである。